
フィオナの転生物語

ことみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フィオナの転生物語

【Nコード】

N1608Z

【作者名】

ことみ

【あらすじ】

ルーディアス王国に住む大貴族の娘・フィオレンティーナは転生者だ。12歳のおり、母親である公爵夫人につれられいったパーティで彼女は運命的な出会いを果たすのだが　？魔法あり、ラヴありの物語。

プロローグ

私の名前は、フィオレンティーナ・セリス・レンディア。転生者だ。ル・ディニア王国の片隅に居をかまえている。家は貴族だ。しかも、公爵家。古くからある、由緒ある家なのだ。王家とも交流が深い。私の家は聖魔術士を代々、輩出している家でもある。兄様ふたりも若くして出世コースにのる前途有望な若者だ。わたしは、今の家族がとっても大好きだ。

「フィオレンティーナ様。今日は、魔法の勉強の時間です。カレル先生がお越しですよ」

「ありがとうございます、ルチル。用意はできてます。先生は、どちらに？」

「もう間もなく、お越しですよ。それにしても、お嬢様の勉強は日に日に進んでいきますね。12歳でここまで教育が進んでいる、貴族の子女はお嬢様だけだと思いますよ」

鼻が高いですわ！と興奮するルチル。目を輝かせて嬉しそうに語られると、なんだか悪い気がしてしまう。本当は精神年齢20代後半だとは言いにくい。ありがとうございます、とわたしは彼女に無邪気な笑顔をつかべて笑いかけた。そうしているうちに、カレル先生が部屋にこられた。

「おはようございます、フィオレンティーナお嬢様。先日の復習はすみしかったですか？」

「はい、先生。高等魔法技術理論でしたね。やっておきました。今日は何をされますか？」

「そうですね、では複合魔術の実践にいたしましょうか。まずは、これを見てください」

そういうと、先生は 凍りつく風 の呪文を唱えた。すると、風とともに氷の矢がうまれ、部屋にあった花瓶が風をうけて、凍りついてしまった。わたしも、と思いいおなじスペルで呪文を唱える。

風よ、すべてのものを我が意のもと、凍てつかせよ

狙いを受けたベッドが瞬時にして凍りついた。すぐに解かなくてはいけないため、解除魔法を唱える。

解除

先生も同時に唱えたので、部屋の被害はゼロだ。外でやりたいのだけれど、今は冬なので中でやるものとなっている。暖かくなるまでの我慢だ。すぐに考えをやめ、先生にむきあう。このあとも、いくつかの狙いをさだめて凍りつかせ、解除するといった授業だった。高等魔法だと解除が完璧に行えるものになっている。初歩だと四次元素を覚えることから始まるから、わたしの腕は王宮でも十分通じるものだったりする。

「さすが、お嬢様ですね。これは将来が楽しみです。お兄様方に劣らぬ腕前ですよ」

「ありがとうございます、先生。これからも日々、頑張りますね」

「あらあら、フィオナちゃんは頑張りやさんね。ママたちをすぐに追い越してしまいそうだわ」

「お母様！いらしてたのなら、いってくださったらよかったのに」
そういつて近寄ると、頭をなでられた。なんだか、くすぐったい感じ。ふにゃ、と顔をやわらげるとカレル先生は頭をさげて、退出していった。ルチルにお茶の用意をしてもらって、お母様と二人きりになる。

大事な話でもあるんだろうか？顔に出たのだろうか、お母様はくすつ、と笑つと私に視線をあわせた。

「あのね、フィオナちゃん。今度、お城でパーティが開かれるの。お友達を作るのに、いいかと思つて。ママといっしょにいきましょう」

「はい、お母様。一緒にいきます。お兄様方にはお会いできますか？もう二ヶ月もお帰りになつてません。淋しいです」

「そうね、淋しいわね。その日はいいことがあると思つから、楽しみにしておいてね」

「？わかりました。楽しみにしておきます」

そして、その数日後。お城でパーティが開かれた。はじめてくるお城は広く、お母様とはぐれてしまった。どうしようか、とまわりをみわたしていたら、声をかけられた。

「はじめまして、レディ。お名前をうかがつても？」

それが、すべての物語の幕開けの合図だった。

プロローグ（後書き）

魔法ものをはじめました。応援よろしくお願いします

1・出会い

かけられた声の主を探して振りあおぐと、16・7歳の貴公子然とした少年が風に金髪をなびかせながら、ゆったりとした微笑を浮かべていた。優しい容貌は、妙齡の貴族の令嬢方が放っておかないだろうな、という感想を一目見て持ってしまった。

「はじめまして。わたしは、フィオレンティーナ・セリス・レンディア。レンディア公爵家のひとり娘です」

「レンディア公爵家の・・・そうか、君が『レンディアの癒し姫』なんだね。風の精霊たちがここに集まって楽しそうにはしゃいでるみたいだから、みにきたんだ。思った通り、可愛い姫だね」

「そんな二つ名があるのですか？はじめて聞きました。お褒めいただいた、ありがとうございます」

そういうと、彼は有名な話だよ？と教えてくれた。パーティはもうはじまるのに、お母様はどこに行かれたのだろう？主賓に挨拶だろうか？いや、過保護なお母様のこと、私を探しているに違いない。そう考えて、呪文を唱えることに。

風の精霊・シルフ。我が探し物を当て、その居場所を教えよ

そうすると、さわやかな風がふき、お母様の居場所を教えてください。これは単一魔法といい、ひとつの魔法のみをもちいるものだ。本来は探し物をあてるだけなんですけど、場所までわかるように、私のアレンジを加えてある。

「お母様を見つけました。会場入口にいるようです。ごめんなさい、早くいかなくてはいいけません」

「それでは、私と一緒に行きましょう。あなたの手をとることをお許しいただけますか、フィオレンティーナ嬢」

「はい、よろしくお願ひします。すみません、お名をうかがっても構いませんか？名をおよびするのに、知らないのでは不便です」

「貴女自身が知りたいから、でないのが残念ですが。私の名前はシャルルです。覚えておいてください」

そういうと、シャルルさんはにっこりと、人当たりのよい笑顔をわたしに向けた。ああ、この素敵な笑顔にみなが瞬殺されるのね、とわたしは心の中で相槌をなんどもうった。だが、微笑みかけられて悪い気はしないので、わたしもにこ、とシャルルさんに微笑み返すのだった。

「フィオナちゃん！ママ、とつても探して・・・まあ！」

会場入り口までレポートの魔法で移動すると、お母様がかけよつてきて、心配げな顔を浮かべたかと思つたら、シャルルさんを見るなり目をぱちくり、としたあと暖かな表情にかわつた。なんだ？

「シャルル殿下と一緒にだったのね。ありがとうございます、殿下」

「いいえ。私がフィオレンティーナ嬢を誘つたのですから。このまま、彼女をパートナーとしてお連れすることをお許しただけですか？」

「もちろん、娘が了承すれば構わないですわ。どうする？フィオナちゃん」

にこにこと笑みをたやさず会話する、お母様とシャルルさん、もとい、シャルル殿下。そんなこと、急に聞かれて応えられるわけがない。！！だけど、雰囲気からしてここはOKというべきところ。にこにこと笑ってわたしの反応をみられ続け、ついにわたし

は心の中で白旗をあげ、

「わたしでよろしければ、よろしくお願いいたします」

と返事を返したのだった。

1・出会い（後書き）

フィオナちゃん、ここにこそ攻撃に弱いようです（笑）

2・社交界デビュー

シャルル殿下の腕になんとか腕をからませ、パーティ会場に入場するとざわつ、と会場がどよめいた。

「どなた？あの御令嬢は・・・」

「知らないのか？『レンディアの癒し姫』だ。なぜ殿下とともに？まさか、将来の伴侶を決められたのか？」

「うそっ！信じませんわ、殿下にはわたくしこそがふさわしいのにっ・・・！！」

いやー！とか、きゃー！とか、悲鳴が聞こえた。聞こえてるのよ、あなた達・・・と思いつつも淑女としての礼を完璧にこなし、会場の中央にすすむ。ワルツの音楽が流れだした。リズムにあわせ、ステップをふむ。自分がへたとは思わないが、うまいともいえないと思っていた。が、殿下のリズムを感じて踊ると、自分がとてもうまく踊れているように感じた。

「お上手ですね、フィオレンティーナ嬢。このようにうまく踊る方は初めてです」

「そのようなこと・・・殿下がうまく躍らせてくれてるのです。自分がつまいのではないことはわかっていますから」

「私がつまいというのですから、自信をお持ちください。あなたはお上手なのですよ」

「ありがとうございます、シャルル殿下」

少しうつむきながら、ほおが赤くなっていくのを感じた。そんな顔して微笑まれたら、誰だっけ赤くなると思う。また、まわりで悲鳴が聞こえたが、私のしったこっちゃないぞ。パートナーと言っても、

今回誘われただけなのだから。そう思ってくるっ、とターンをまわってみせると、ドレスがふわっ、と広がった。

「春の妖精みたいですね・・・」

「本当だ、衣装とダンスがすごくあっている・・・」

「ステキですね・・・」

まわりがほう、と感嘆の息をはくのを遠くで踊りながらみる余裕すらあった。やはり殿下はうまいのだ。曲が終わり、最後の礼をお互いにとる。わっ！と拍手喝采となった。なんだか、パーティの主役になったような気分。シャルル殿下に腕をとられ次の曲がはじまる前にフロアの隅にくると、すぐに令嬢方に囲まれた。

「シャルル殿下！この方とはどういうご関係ですか？」

「私も知りたいです！この方をパートナーとしてお連れになった理由はなにか、教えてくださいませ！」

「お願いします、殿下！」

令嬢方はぎらぎらした目つきで私を見ていた。それはそうだろう、いくら公爵家のひとり娘とはいえ、まだ12歳。殿下のお相手としてみるのは、納得がいかないのだと思う。少しずつ距離をとろう、と離れようとしたら、手をとられ、手の甲に口づけられた。

「この方は、私が心を奪われた唯一の女性。私の春の女神なんです」

ちよつとまった　！なんてことを言うんだ、殿下。手を放したくとも、つかまれている力が強く、ふりほどけない。令嬢方はまたもや、悲鳴を上げ、中にはふらふらと倒れたりも。お母様、いいこととはこのことだったのですか　？この発言により、私はいち貴

族の令嬢から、世継ぎの王子の想い人として、一躍時の人となったのである。

3・兄たちとの再会

パーティが終わってから、ご令嬢方の追及の手を逃れたわたし。オナナの嫉妬はこわいものがあるので、まだ12歳であることを強調し、シャルル殿下の気が変わらないとは限らない、と喋っておいたのだ。早々にお母様をつかまえて自宅にもどり、お兄様方と会うことはかなわなかった。しばらくぶりに、再会できるはずだったんだけどなあ。わたしはいつもの元気がなく、やや落ち込んでいた。

「どうしたの、フィオナちゃん。今日はサーディとシヴィルが帰ってくるって連絡がはいったのに」

「本当ですか、お母様！嬉しいですよ、すぐにお出迎えの用意をいたしましょう。お兄様たちはいつまで滞在してくださるのでしょうか？」

「まだ聞いてなくてね。あの二人ならすぐよ、・・・ね？」

魔力が部屋の中に集中していくのを感じていたら、シュンっ！と音がしてお兄様方が姿をみせた。すぐに、そばによって抱きつく。お兄様方は嬉しそうに微笑み、だきとめてくれた。

「おかえりなさいませ！ずっと、お会いしたかったです。今回はいつまで屋敷におられますか？」

「しばらく、一緒だよ。嬉しいな、僕たちもだよ、フィオナ。可愛い僕らの天使。しばらくぶりだね。元気にしてたかい？」

「はい、フィオナは毎日元気になっておりました！お兄様方に追いつけるよう、日々努力しております」

離れながらさういって、お兄様方とお母様とテーブルにつく。ルチルに紅茶をいれてもらった。暖かな、カシユカシユの紅茶。香りが

たちのぼり、味わいながら飲む。日本でもあった紅茶がル デイニアにもあるのは、嬉しいことだった。考えながら飲んでいたら、か
るく肩をつかまれた。

「ファイオナ、聞いてるの？」

「！すみません、お兄様方。考え事をしておりました。もう一度、
おっしゃっていただけますか？」

「だから、シャルル殿下の想い人になったって本当？僕達、王宮で
聞いたときびっくりしちゃったよ、・・・ってファイオナ？なんでむ
せてるの？」

「ごほつごほつ、だ、誰がそんなことを・・・」

「え？シャルル殿下ご自身がだよ。いつも、貴族の若い女性にきか
れては、ファイオナが唯一想う女性だとお答えされているよ。幸せ者
だね、ファイオナは」

本当に嬉しそうにお兄様方は微笑むが、そのむこうにご令嬢方のこ
わーい顔がみえた気がして、若干引いてしまう私だった。

4・紅の薔薇

お兄様たちは言葉通り、しばらく滞在してくれるようだ。今日も連携魔術の実践を空間をつくってしているのを、わたしは防護壁を築いてみていた。

(あれから、うわさはどうなったのかな？消えたのだといいんだけど……。これから王宮へいくことがあれば、また言われかねないし……)

雑念は、防護壁を鈍らせる。そのため、すぐに考えをうちけし、新たな防護壁をはる。これでよし、と。にしても、あれからシャルル殿下は何も動きがないみたいだ。もしかして、諦めてくださったのかしら　？希望的観測はその日の午後によぶられた。大輪のバラが我が家に届けられたのだ。

「このバラは、どなたからなのですか？お母様」

「あらあ、フィオナちゃん。もちろん、シャルル殿下からよ。メッセージカードがついてるわね。あけてみなさいな」

「メッセージカード、ですか？あけてみます……。なになに、私の愛しき妖精へ、愛をこめてこのバラを贈ります　このバラは、魔法ではありませんね？お母様。王宮に咲いているものではありませんか？」

「そうね。これは、サーデイたちが詳しいのではなくて？ねえ、サーデイ、シヴィル」

「そうですね。これは、王宮の中庭に咲くものです。王家からこのバラを贈る意味って知ってるかな、僕らのフィオナ」

バラを贈る意味？きよとん、と首をかしげると、くすつと笑みをも
らしてからシヴィルお兄様が教えてくれた。

「このバラは、特別のもの。王家から贈られるものには、求婚の意
味があるんだよ。フィオナ」

「！求婚、ですか？わたしに？シャルル殿下が？」

「僕たちもびつくりだよ。ねえ、サーデイ？」

「うん、シヴィル。まさか、紅の薔薇を贈られるほど、フィオナが
想われてるなんて、思ってもなかったよ」

そうだよねえ、うんうん、と頷きあうお兄様たち。かくして、わた
しは今度はシャルル殿下に求婚されたものとして、王宮へむかうこ
とになったのである。

4・紅の薔薇（後書き）

久々の更新ですw

5・婚約成立

王宮へ赴くため、普段の服でいくわけにいかず、正装をきることになる。レンディア公爵家の紋章入りのお母様がデザインしてくれたドレスだ。ドレスには、先日シャルル殿下からいただいた「紅の薔薇」をふんだんにつけてある。頭にもつけて、まるで薔薇につつまれた気分になる。用意が整ったところで、普段ならレポートでいくところを、王家とつながる魔法の扉をつかって、王宮へとすすむ。すでに先触れの鳥をいかせてあるから、咎められることはない。

「お待ちしておりました。レンディア公爵令嬢、フィオレンティーナ様。こちらへどうぞ。殿下がお待ちにございます」

「ありがとうございます。あの、どちらへむかうのでしょうか？」

「つけば、おわかりになるかと思えます。私からは、申し上げることができません。殿下ご自身から語られることかと・・・」

「わかりました。無理をいってしまい、すみません」

いいえ、構いません、と返してくれた案内の家令のようなひとは、優しく微笑んでくれた。王宮内で使う転送魔法装置のおかげで、余計な魔力を使わず、移動することができる。移動した先は、王宮内の中庭のようだった。きれいな花々が咲き乱れ、鳥たちのさえずりがきこえる。陽光がまぶしく、手をかざして空をみあげたら、空は雲一つないきれいな空だった。中庭にひとをみつけ、みてみるとシャルル殿下だった。

「ようこそ、僕の春の女神。待っていたよ、君をこの中庭によべる日」

「シャルル殿下、お久しぶりにございます。先日は、綺麗な薔薇をありがとうございました。今日はお返事をしに、参りました」

殿下のそばまでいき、見上げると真剣な瞳のシャルル殿下に、どきつきとする。みつめあったまま、先に口をひらいたのはわたしだった。

「この薔薇は王家からの求婚の意を表すと、お兄様たちに聞きました。わたしはまだ12歳です。それでも・・・？」

「そうだよ、フィオレンティーナ嬢。僕は、君でなければだめだ。初めてみたとき、感じたんだよ。この人が、僕の運命の相手なんだって」

「わたしが承諾した時点で、婚約は成立します。王家の式典法にともない、取り消しは不可能です。それでも構わないというのであれば、お受けいたします」

「承諾してくれますか、フィオレンティーナ・セリス・レンディア嬢」

「はい。承諾します、シャルル殿下」

そっと跪くと、額に殿下の指がふれ、まばゆい光を放ったと思ったら、額に宝石をちりばめられたサークレットがはめられていた。王家と婚約関係が成立した、ということがこれで証明される。ゆつくりと、たちあがるとにつこりと微笑まれる殿下。つられて笑ってしまふ。そんな嬉しそくにされると、少し恥ずかしくなってしまう。サークレットがはめられたことにより、レンディア公爵家は一貴族から、王家との婚姻関係が作られたことになる。

この出来事があったから、3年の月日が実にたつこととなる。わたしは15歳に、シャルル殿下は19歳になられ、これより本格的なお妃修行に入ることとなる。

6・春の陽気の中で

15歳になって、いまは季節は春。うららかな陽気に包まれている。私は移動魔法で今日も王宮へ赴く。シャルルの婚約者として。婚約前は『殿下』という敬称をつけていたけれど、いまはよびすてにしてほしい、といわれてシャルル、とよぶことになっている。もちろん、私も『フィオナ』とよばれている。

「お待ちしておりました、フィオレンティーナ嬢。殿下がお待ちにございます、中庭の方へお行きくださいませ」
「ありがとうございます。」

転移装置にのり、中庭へと降り立つ。小鳥たちのさえずり、うららかな春の陽気。まばゆい光の中に、シャルルはたっていた。呼びかけると、振り向いて春の陽のような微笑みを浮かべる。こちらへ近づいてきて、軽く抱きしめられてキスをする。婚約してからというもの、キスや抱きしめられたりなどは、挨拶がわりとなっている。

「いらつしゃい、フィオナ。最近、お妃修行の方はどう？魔術の方より作法とかを優先させてるらしいけど」

「ええ。そうなの、順調に進んでいるわ。礼儀作法もマナーも大丈夫よ。婚約成立から3年たつのだもの。早くて夏、遅くとも秋には終わるそうよ」

「そうか。それが終わる頃には結婚式の案内を国内外に出さなくてはね」

そうね、とうなずきながらシャルルをみると、嬉しそうだ。シャルルも今年で19歳、ずいぶん待たせてしまったし、会う時間も大切にしながら、お妃修行も頑張りたいものだ。お兄様たちは、まだ婚

約者はいない・・・というか、わたしが結婚するのを待っているみたいだ。家にしょっちゅう帰ってきては、わたしとの時間を大切にしてくれる。お父様も春の月の終わりには一度帰る、との連絡が入っている。今まで一度も帰らなかったわけではなく、わたしが外にでているときに、お父様が帰ってきてすれ違いになったり、だったりした。

「フィオナ、なに考えてるのかな？ずいぶんと、思案顔だけど・・・」

「ん？家族のことよ。だめだったかしら？」

「僕のことを考えてほしいな。目の前にいるのに、他ごとを考えるなんてね。そうじゃないのかい？」

「ふふ、わかったわ。シャルルといつも会えるわけではないし、あなたのことを考えることにします」

お互いの顔を見て、くすくすと笑いあった。うららかな春の日差しの中、私たちは最高に幸せな時間を共有していた。

6 ・春の陽気の中で（後書き）

今年最後の更新です。みなさん、よいお年を。来年もよろしくお願
いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1608z/>

フィオナの転生物語

2011年12月30日00時51分発行